



展示タイトル:「WVlog : personal」

参加作家:石居真信、尾崎藍、黒木結、小山友也、小山渉、斎藤英理
企画提案:尾崎藍

展示期間:2022年 5月27日(金) - 6月12日(日)

開催時間:

水・木・金 | 18:00-21:00

土・日 | 12:00-21:00

定休日:月・火

入場料:400円(セレクトティー付き)

会期中イベント:

5/28(土)16:00 -

Opening party

1,000円(軽食+1Drink+入場料)

6/12(日)15:00 - 18:00

artist talk + Ongoing School

1,000円(お好きなケーキ+1Drink+入場料)

中高生にもわかる作家本人による展示作品解説つき。

イベント中は1Fでゲストを迎えたトークイベント。

2F展示会場ではゆるりと作家による作品解説。

・15:00 - 15:50 石居真信 × 小山渉 ゲスト:かわかみしんたろう(精神科医)

・16:00 - 16:50 尾崎藍 × 黒木結 ゲスト:田辺裕子(演劇研究者)

・17:00 - 17:50 小山友也 × 斎藤英理 ゲスト:野村眞人(演出家)

・18:00 - 18:30 座談会

企画概要:

Art Center Ongoingにて、アーティストの尾崎藍による企画「WVlog : personal」を5月27日(金)より開催いたします。

展覧会タイトルの「WVlog」とは、WorksとVlogを合わせた造語です。Vlogは、YouTubeなどに数多くアップロードされているジャンルの一つで、主に日々の暮らしを記録して動画で紹介するものを指します。

この展覧会は、企画提案者の尾崎がコロナ渦で身動きが上手く取れない自身と、Vlogを通して人々の日常を画面越しに見て重ねた経験から着想した企画になります。「WVlog」は、今回はひとまず「Vlogを下敷きとした作家自身の身体性や思考、時間に焦点を当て記録した映像作品」として位置付けました。

会期に合わせてYouTube上で参加作家による「WVlog」の公開と、会場では作家それぞれの「最もpersonalな作品」の展示を行います。2つの作品を通して、作家たちの制作の根幹を見つめ直す試みを、この機会にぜひご高覧ください。

※YouTubeチャンネル:

https://www.youtube.com/channel/UCv9oNd9v_EI9ryCGhpTjtbw

statement:

一番"personal"な作品を見せてほしい。その思考を辿れるような作品も見せてほしい。
"personal"というところにはVlogを見るときの興味のようなものが続いている。

人の生活を覗き見るようなVlogは面白い。会ったことのない人が、料理してご飯を食べたり散歩に行ったり、その日の出来事を話す様子を貪るように見た。もちろんそれらが本当のことなのには分からぬ。ただ誰かの生活に、自分を重ねて見ることがしたかった。なにか変化が必要なんだけど身動きが取れない。私は繭の中にいるのだろうか。繭の出方がわからない、あの時の蚕(※1)なんじゃないだろうかと、考えることが全部蚕に巻き取られていく。

何か変化が必要なんだけど身動きが取れない時、自分を人に重ねることはできた。Vlogを撮る側ってどんなことなんだろう。自分を振り返ることができて更新もできる。考えの共有、イメージも扱える。撮る側の方が収穫がありそうだ。Vlogを撮ってみたい。蚕のことも消化できるだろうか。

日々の様子を記録する。なんとなく見てしまうものも、なんとなく記録する。自分が食べるものの下拵えをするところを記録する。編集の時には見返しながら、記録された無意識を意識的に拾っていく。

Vlog的な映像を作つて時間が経つうちに熱が冷めた気がした。そんなものだっただろうかと考えてみたら、距離ができたから熱を感じにくかっただけで、辿つてみるとまだまだ熱い。発酵するのか腐敗になるのか、この内容にどう付き合えばおいしくなるのか。この距離感を探るような、ちょうど良い塩梅を見つけるのは難しい。他の人はどんなふうに料理していくのだろう。

たくさん食べてパンパンに膨らんだ蚕は食べるのをやめて糸を吐き始める。満足していない私は繭を作る前なのかもしれない。まだまだ見たいものがあると思った。

2022/04/23 尾崎藍

※1...海で強い日差しを浴びたら肌がひどく日焼けした。皮が剥ける直前の肌は昔触った蚕の幼虫にそっくりだったことから、蚕の幼虫を飼い始める。短い時間で大きく変化する蚕の体と、小さな変化に最近気がつき始めた自分の体を重ねて1万字のテキストと映像インスタレーションを制作。尾崎藍「蚕の肌、藤沢、卵を茹でて、繭を茹でる(2020/7/31~2021/1/7)」(2020, text)、「silent tango」(2020, video installation)

会期中イベント:

5/28(土)16:00 -
Opening party
1,000円(軽食+1Drink+入場料)

6/12(日)15:00 - 18:00
artist talk + Ongoing School
1,000円(お好きなケーキ+1Drink+入場料)
中高生にもわかる作家本人による展示作品解説つき。
イベント中は1Fでゲストを迎えたトークイベント。
2F展示会場ではゆるりと作家による作品解説。
・15:00 - 15:50 石居真信 × 小山渉 ゲスト:かわかみしんたろう(精神科医)
・16:00 - 16:50 尾崎藍 × 黒木結 ゲスト:田辺裕子(演劇研究者)
・17:00 - 17:50 小山友也 × 斎藤英理 ゲスト:野村眞人(演出家)
・18:00 - 18:30 座談会

参加作家：

石居真信(いしい・まこと)

社会におけるあらゆる事物の”活きた経験”への翻訳、対話、雑感などをベースに、さまざまなメディアやパフォーマンスを用いて制作をしている。主な展示に「ジョンには見えている」(Braveness Contemporary、2020)、パフォーマンスに「なるべく誠実にやる気のある灰を残す」(アートラボはしもと、2018)

<http://www.makoto-ishii.com>

尾崎藍(おざき・あい)

身体を通した他者との交感をテーマに制作。生きる上で魅力的だと感じた動物の行動やコミュニケーションから想起するイメージなどをドローイングや文字にし、写真や立体、アニメーション、映像などに展開する。主な展示に「Artists in FAS 2020」(藤沢市アートスペース、2021)、「群馬青年ビエンナーレ 2019」(群馬県立近代美術館、2019)、「明け方の計略」(駒込倉庫、2018)など。

2022年9月からRijksakademieのレジデンスプログラムに参加予定。

<https://www.ai-ozaki.com>

黒木結(くろき・ゆい)

身近な問題を私的・公的な面から捉えなおし、理解や解決をはかる機会として、他者の協力を得ながら作品制作や展覧会企画などを行っています。

近年の参加展示として「ARTS CHALLENGE 2022」(愛知文化芸術センター、2022)、「ALTERNATIVE KYOTO / 南丹エリア “南譚 介在する因子”」(京都府JR八木駅周辺、2021年)、展覧会企画として「思わぬ展開 ignored plots」(VOU/棒1Fギャラリー、京都、2021)など。

小山渉(こやま・わたる)

社会と個人の関係のあわいに立ち現れる人間の身体と精神のありようをテーマとして、映像や音、写真、立体によって作品を制作する。主な個展に「心臓が動いている The Heart is Beating」(デカメロン、2021年)、「Untouchable」(北千住BUoY、2019年)。グループ展「すみっこCRASH☆」(無人島プロダクション、2022年)、「ALTERNATIVE KYOTO / 南丹エリア “南譚 介在する因子”」(京都府JR八木駅周辺、2021年)など。現在は「三菱商事アート・ゲート・プログラム2021-2022 / 部門:ブレイクスルー」支援アーティストとして採択されている。

<https://www.watarukoyama.com>

小山友也(こやま・ゆうや)

制作では、交感の仕方から要素を抽出し、既存の枠組みに従属している身体の可視化と侵食によって、未来の感性を模索する。

2013~2043 SPACE OPERA

2015~2019 CSLAB管理人

2016~ Ongoing Collective所属

近年の個展

2020 “景色と配置”〈引込線／放射線〉サテライト, 多摩川二ヶ領上河原堰下流の中洲,
Kanagawa

2019 "BAD NEWS:about Vietnamese technical interns in Japan" HoiAn,Vietnam

2019 "DONUT PLANET" Art Center Ongoing,Tokyo

近年のグループ展

2021 "S A Y O N A R A - M a r k II "TOYOTA Mark II ,Tokyo

2021 "どうぶつえん" TOKAS,Tokyo

2020 "Whenever Wherever Festivalしきりべんと!vol.3"元映画館,Tokyo

斎藤英理(さいとう・えり)

1991年福島県生まれ。2015年和光大学表現学部芸術学科卒業。記憶や認識など目に見えない不確かな動態をモチーフに、映像メディアを用いて制作を行う。近年の主な展覧会に、「暗くなるまで待っていて」(東京都美術館、東京、2021年)、「2020年の栄光」(YUMI ADACHI CONTEMPORARY+あをば荘、東京、2020年)、「1GB」(スパイラルホール、東京、2020年)など。スクリーニングには、「Le FIFA」(カナダ、2022年)「第14回 恵比寿映像祭」(東京都写真美術館、東京、2022年)「イメージフォーラム・フェスティバル2020」(シーター・イメージフォーラム、東京、2020年)、「海に浮かぶ映画館」(神奈川、2019年)など。

<https://www.erisaito.info>